

《資料紹介》

県立博物館の織物Ⅱ

—— 紋 織 ——

大 城 志津子[★]

与那嶺 一 子^{★★}

沖縄の紋織には、浮糸で文様を織りだす「花織」、布の表裏両面ともに経糸が浮いて文様を作りだす「ロートン織」、振綜紬を使った「紹織」、紹織と花織を併用した「花倉織」などがあり、これらの多様な技法は現在も伝承され織り続けられている。

これらの紋織類は、インドや東南アジア諸国の影響が強い南方系の紋織と、首里を中心として織られた中国紋織の流れを組むものと大きく分かれる。今回はいわゆる読谷山花織やティーバナ織、グーシバナ織などの南方系の織物については省き、沖縄の多彩な紋織の中でも中国系の紋織について紹介したい。

首里で多種多様な技法の紋織が発達した背景には、王城をひかえ、政治・経済の中心地であったことが第一に考えられよう。おそらく海外の豊富な物資の中には外国の色とりどりの紋織物があつたであろう。また諸外国へ技術を学びに行く機会も、沖縄へやってきた外国人から技術を学ぶ機会も、他の地域よりは恵まれていたはずである。

実際に中国からは、かなりの量の絹織物が沖縄に入ってきている。1424年から1876年までの交易記録である『歴代寶案』によると、洪熙元年（1425年）には中国皇帝から歴代国王や進貢使に色々な技法の中国紋織が贈られている。ざっと目を通しただけでも「紗」「緞」「羅」「羅緞」「綵緞」「蟒緞」「縐子」「綸子」といった記述がみられる。さらに『球陽』には、中国に渡って紋織を学んだ記述があり、これが中国系の紋織技術導入の確実な記録とされている。

「国吉、□て貢使に随ひて聞に入り、始めて緞疋を織るの法を学びて回り来り、始めて浮織緞を善くす」（1659年）

ここでいう浮織緞は花織のことだと考えられている。家譜資料の下賜品や交易品目に出てくる紋織類が18世紀から19世紀にかけて集中しているところから、この国吉の技術導入以後に、沖縄での紋織技法が定着したと考えてよいのではないだろうか。

『球陽』や19世紀に評平所が定めた『衣服定』によると、緞子、紗綾、綸子、緞綱な

（★おおしろ しずこ 琉球大学教授）

（★★よなみね いちこ 県立博物館学芸員）

どの中国紋織は王府時代に宮廷衣裳（官服、礼服）として使用していたことが分かる。しかし、緞子、紗綾、綸子といった織物は沖縄の機（構造上、織ることがむずかしく、さきほどの『球陽』に「首里の向得礼（天久里之子親雲上朝嘉）は一中略一命ぜられて間に入り綢緞・紗綾等の織法を学びて本国に帰り至る」（1736）とあるが、天久里之子の学んだ技法は、現在織られているようなロートン織や花織、花倉織といったものに改良されて伝えられたのではないかと考えられる。

沖縄で今も織られている首里花織、ロートン織、紹織、花倉織といった紋織物は、中国紋織のなごりを残しながら、完全に沖縄独自の文様へと消化されている。中国系の紋織物が沖縄に入り独自の文様を形成していったのには、いざり機の使用が大きく関係していると、田中俊雄氏は『沖縄織物の研究』で述べている。緞子、紗綾、綸子といった織物は、いざり機で織ることは難しく高機で織ることを前提とした組織になっている。日本本土では導入した技法を高機の上で発展させたが、沖縄ではいざり機で織るために技術改良し、他では見られない独特の紋織を生み出したのではないかと著述している。

先に、緞子、紗綾などの紋織物は宮廷衣裳としての需要があったと述べたが、では、それらの影響を強く受けて発展した花織やロートン織などに、どのような需要があったのであろうか。

『球陽』をみると、王府は百官の衣冠について、1525年に定めたのを最初に、次々と百官及び人民の衣服に関する取り決めを制定してゆくが、そこではそれらの織物について規定した箇所は見当たらない。1691年に王府が定めた、薩摩に赴き、衙門に至る時の申口、御物奉行、座敷、当座以上の階級の衣服に藍紋、赤紋蕉布、赤苧紋布、という記録が見られる。1659年に、国吉某が紋織技術を導入しているが、ここに出て来る紋布が今言うところの紋織類かどうか、はっきりしない。

明治17年に西ドイツ、ベルリンの民族博物館が購入した品物の『物品目録清算書』によると、王子・按司及び婦人の部、親方の部、親雲上及び婦人の部、里之子の部で、それぞれ羅織、花織、花蔵織、ヤスラミ袷などの衣裳が挙げられている。また、これらの衣裳のほとんどが朝衣の形態を取っていたことを大城が確認している。

その他、『沖縄一千年史』（真境名安興・島倉竜治著）には、親雲上夫人の冬衣、妙齡の者、浮華、老年は水色小形浮花とある。

また、『衣服定』には、無系諸士の家来、町百姓男女は綾ヤシラミ、花織、羅織着用禁止と記載されており、これらの記述から平民には着用が禁止されていたが、王子・按司から里之子階級まで幅広く、宮廷衣裳として使われていたと想定される。

さて、沖縄県立博物館が所蔵する紋織15点を紹介する前に、技法について簡単な説明を加えておきたい。

花 織

花織は技法の面で、手作業によるティーバナ織やグーンバナ織と紋綜統を使ったものとに分類されるが、本紙面での紹介は紋綜統を使った両面浮花織に限定しておく。両面浮花織は紋綜統により平織組織の緯糸の一部を浮かせて文様を作る技法で、織り込み花織とも呼ばれ、一般には首里花織の名で知られている。読谷地方で織られている紺の地に糸糸を用いて経糸あるいは緯糸を浮かせた花織とは裏に遊び糸が無いという点で大きく異なる。この首里花織の技法の一種に、二色の糸を使ったヤシラミ花織がある。経糸を紺白紺白と構成し、緯糸も紺白紺白と交互に織り込む方法で、服制が解かれた後、無地物と比べて、いち早く庶民生活に取り入れられている。

花織は家譜資料の下賜品として

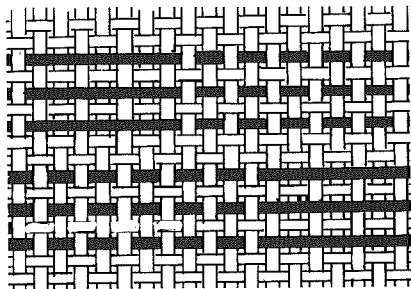


図1 花織の組織図

年 代	紋 織 記 述 一 覧
康熙36 (1697)	太平山花細布一端 (蔡氏家譜)
康熙38 (1699)	太平山花細布一端 (蔡氏家譜)
〃	花中布一端 (蔡氏家譜)
〃	花綿紬二端 (蔡氏家譜)
乾隆4 (1739)	細嫩花蕉布二疋 (向姓家譜)
乾隆41 (1776)	花織布一端 (麻姓家譜)
乾隆57 (1792)	白糸経花織布 (毛氏家譜)
道光25 (1845)	萌地白糸花洞織布一端 (向姓家譜)
〃	染地白糸花倉織布一端 (向姓家譜)
〃	手嶋白糸羅織布一端 (向姓家譜)
咸豊2 (1852)	白糸経羅織布一端 (馬姓家譜)
〃	白糸花織布一端 (馬姓家譜)
〃	雅絲羅目布一端 (馬姓家譜)
〃	白糸経空色花織布一端 (馬姓家譜)
咸豊3 (1853)	銅板花織布一端 (馬姓家譜)
咸豊11 (1861)	白糸花織布一端 (馬姓家譜)

(『那覇市史・家譜資料』より)

1700年代から登場し、18年代後期には、絹織と併用して文様を作る花倉機もみられる。また中国から輸入された桐板の繊維を使った花織も出てくる。

ロートン織

「道屯織」または「両緞」の漢字が当てられ、ドートンとも呼ばれるこの織物は、元になった中国織物が分からないほど完全に沖縄独自の文様へと変化している。文献資料には、ロートン織に関する記述がほとんど見られず、いつから織られ始めたのか明確な答えが得られない。先ほどの『物品目録清算書』の本国固有の織物にも白糸羅トン織布と出ているだけで、衣裳の部には見当たらない。

文様は地色とは違う二色の経糸の部分を一羽に四本の込み差しにするため、経のみがくっきり浮き出す。当館での所蔵は一点のみで、それも後年仕立て直しを行っているため、得られる情報は極めて少ない。日本民芸館が何点か所蔵しており、男衆の衣類、またはドゥスリー（袖丈の短い上衣）に使われたと記録されている。

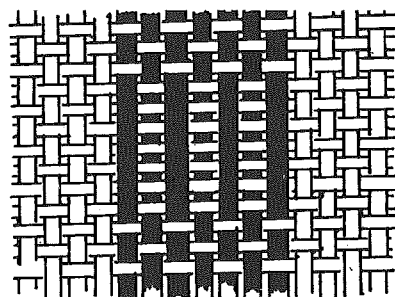


図2 ロートン織組織図

紹織

この織物は、捩綜統によって布に隙間ができるため、夏の衣料として最適である。中国から輸入された紋織類には羅、素羅、羅緞などが見られ、また家譜資料などにも羅織、洞織の表現で登場している。当館所蔵の資料では胴衣仕立てのもの一点が絹である他、すべて芭蕉の素材による。『物品目録清算書』では、士族以上の階級の男子衣裳に出てくる。また『衣服定』でも平民の着用を禁止している。

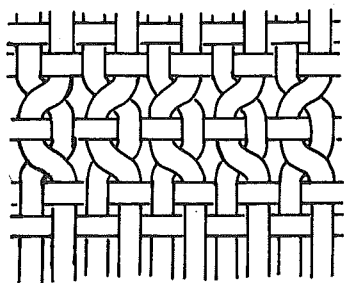


図3 紹織組織図

参考文献

- 『沖縄織物の研究』 田中俊雄・田中玲子著
『首里織の歴史と技法』 那覇伝統織物事業協同組合

木綿紺地花織衿羽織

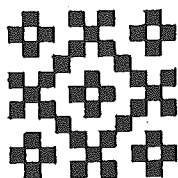
素材：経（木綿） 緯（木綿）

密度：経24本×緯18本

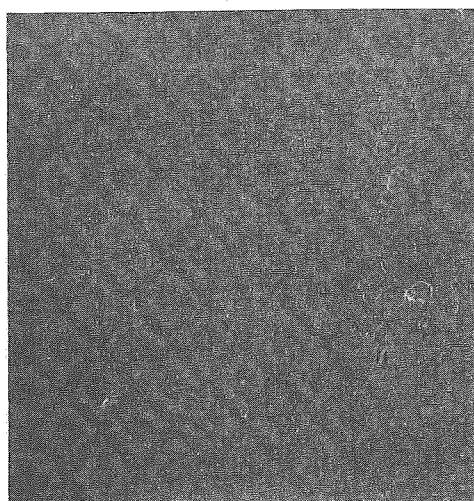
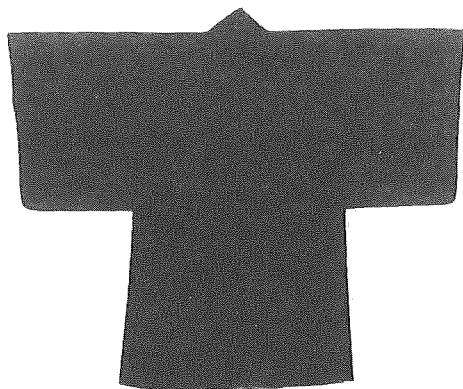
染色：

	経	緯
地色	紺（藍）	紺（藍）

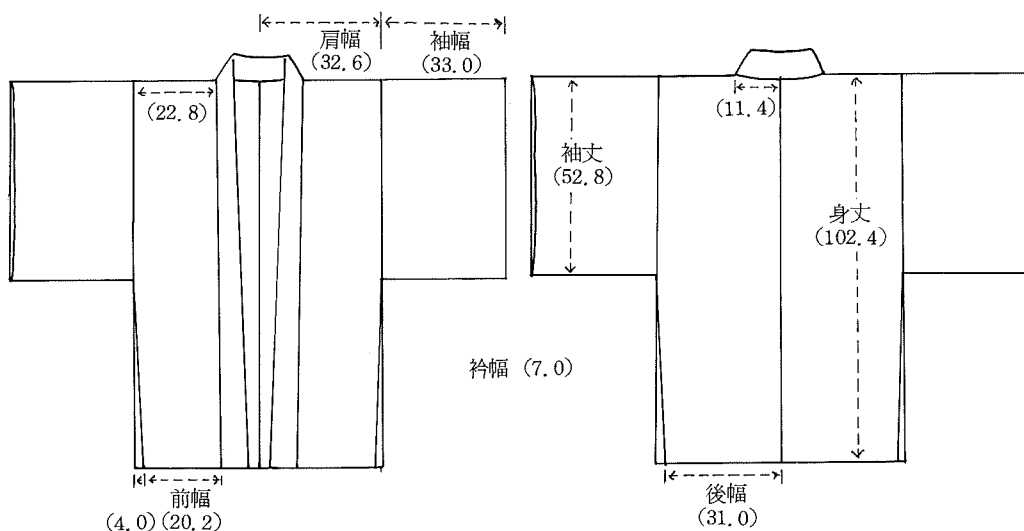
紋のパターン



*素材は手紡ぎの木綿で、地色は藍で濃紺に染められ、びっしりと布目がつまるような形で厚手に織られている。裏は木綿紺地布が使われており、羽織の形に仕立てられているが袖口は平袖の形態となっている。花の部分の文様は経糸が浮いており、制作はさほどふるい時代ではなく大正から昭和にかけてのものだと考えられる。



形態及び寸法



絹浅葱地花織衿上衣

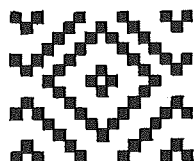
素材：経（絹） 緯（絹）

密度：経36本×緯30本

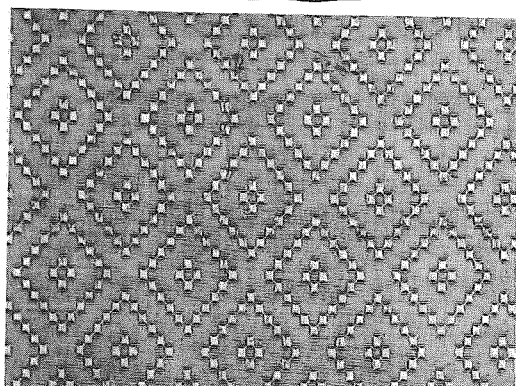
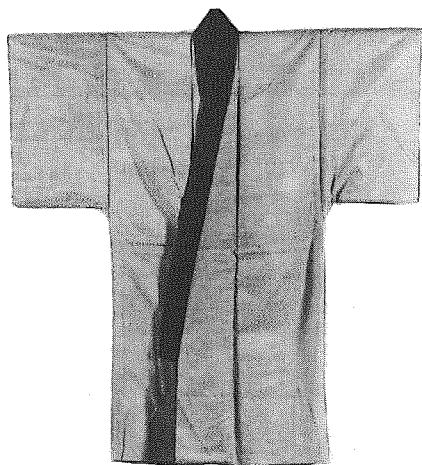
染色：

	経	緯
地色	浅葱（藍）	浅葱（藍）

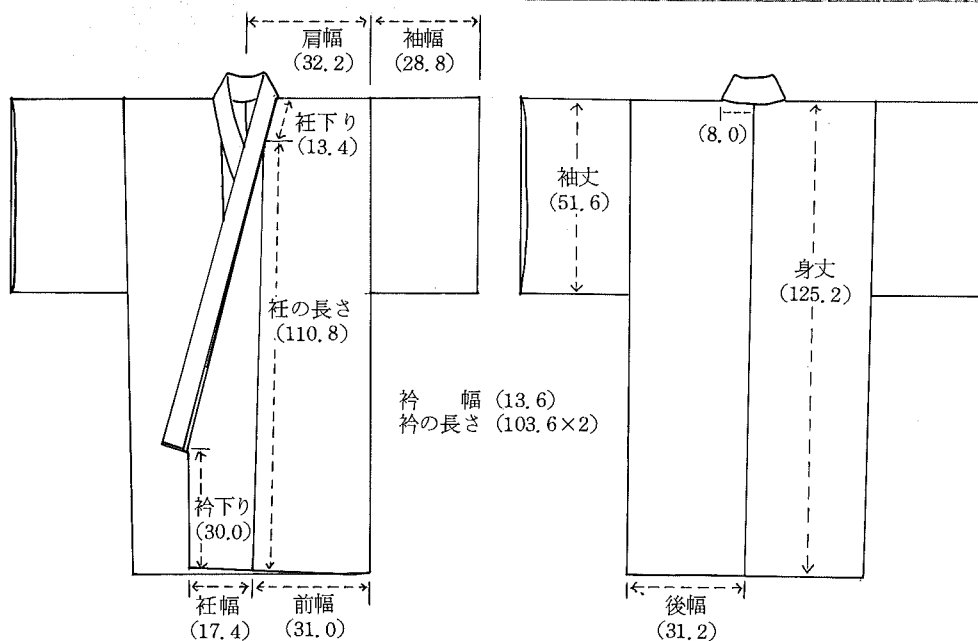
紋のパターン



*経糸と緯糸の色の濃度が違うので、文様が比較的にくっきり浮きでている。また花の部分は経糸の浮いた面を表にして使用している。布は明治中期以前に首里で織られたものと考えられる。また、琉装の形態をとっているが、仕立ては後年に行われたものである。衿、袖裏は赤い別布で见せる効果をねらったものと考えられる。



形態及び寸法



絹浅葱地花織着物

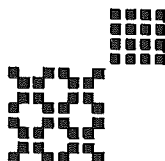
素材：経（絹） 緯（苧麻）

密度：経36本×緯36本

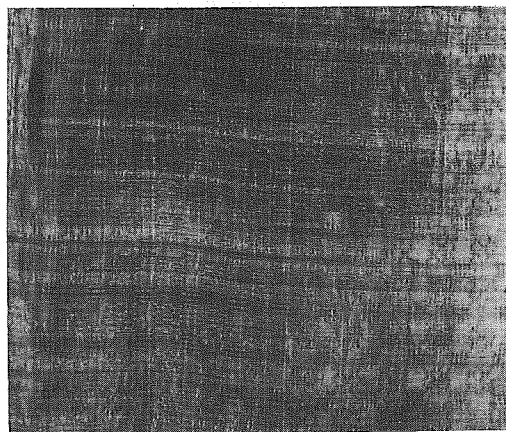
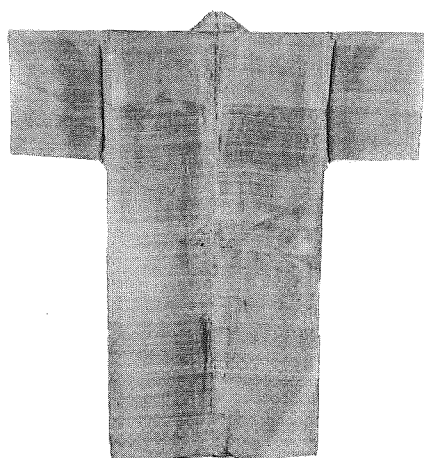
染色：

	経	緯
地色	青（藍）	浅葱（藍）

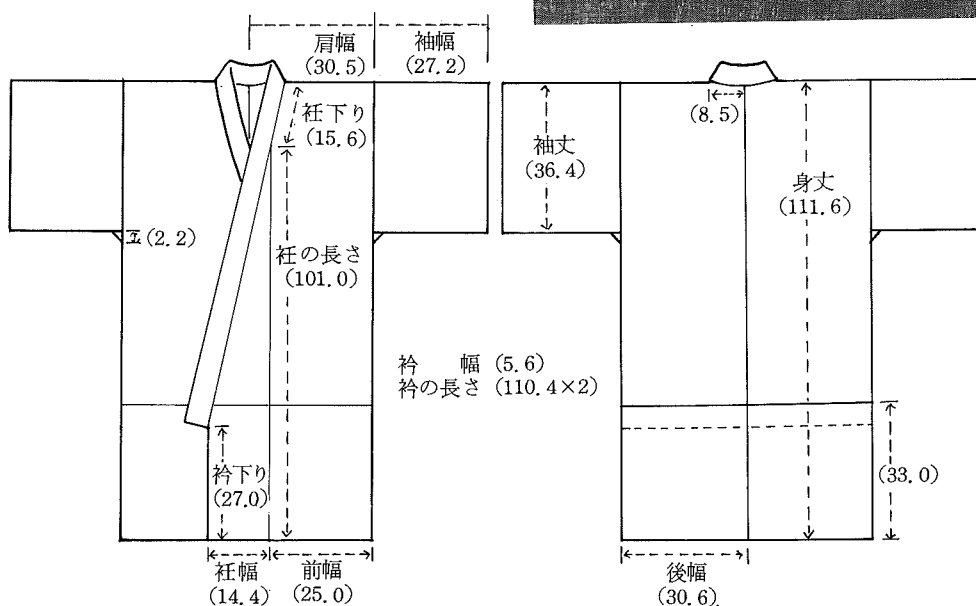
紋のパターン



*経糸は芭蕉か苧麻か判断がつきにくいですが、上質の苧麻であろう。染めは藍により、経緯の濃度が少し違うので、花織の文様がよく浮きで、経糸の浮いた面を表に使用している。着物の丈は短く、襦も入っており、琉装の形をとっているが、木綿の肩当てがあり、広衿でないなど古典的なスタイルとは異なる。製作及び縫製は、大正期に入り、首里で行われたものであろう。



形態及び寸法



桐板朱地花織上衣

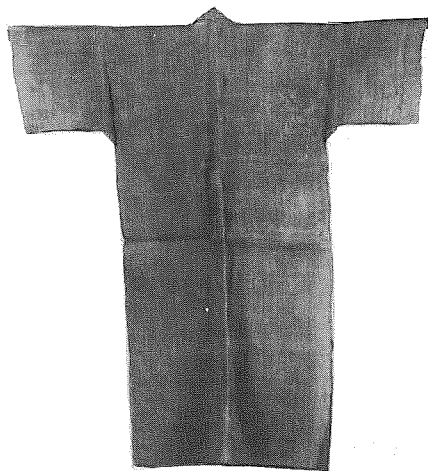
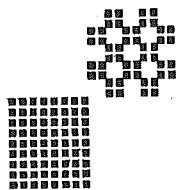
素材：経（桐板） 緯（桐板）

密度：経27本×緯25本

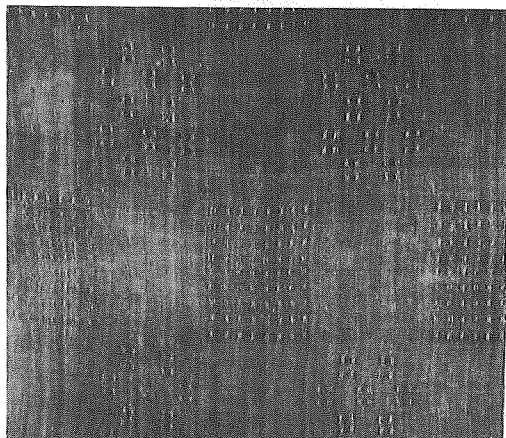
染色：

	経	緯
地色	朱（紅花）	朱（紅花）

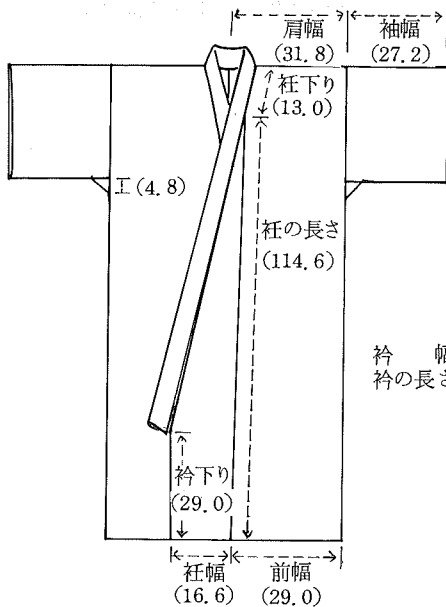
紋のパターン



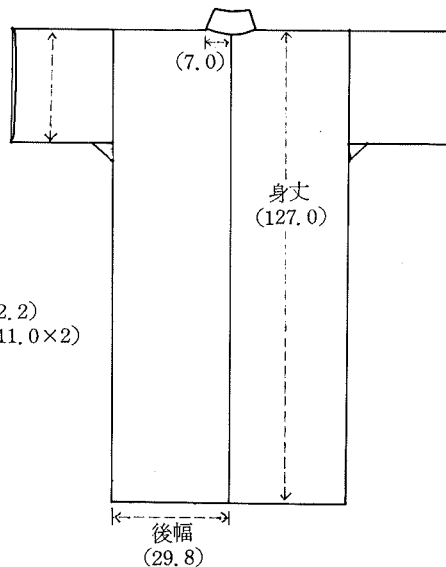
*経糸はつなぎ目には縫い継ぎの跡があり、緯糸には結ぶ玉があるが、共に透明感のある糸である。上衣仕立てで袖は短いが、広衿で衽はかぎ衽断ちである。裾をみると柄を合わせのため、背を先に縫い、脇を後にしたことが分かる。柄が大きく三玉で文様が構成されており、明治初期あたりに首里で織ったと考えてよいだろう。朱色に染めた布を赤染と呼ぶ。



形態及び寸法



衿 幅 (12.2)
衿の長さ (111.0×2)



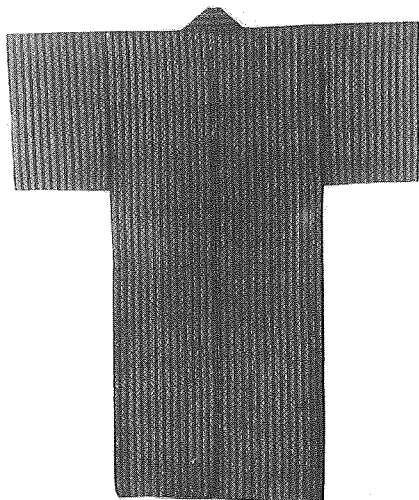
木綿紺地やしらみ花織上衣

素材：経（木綿） 緯（木綿）

密度：経26本×緯25本

染色：

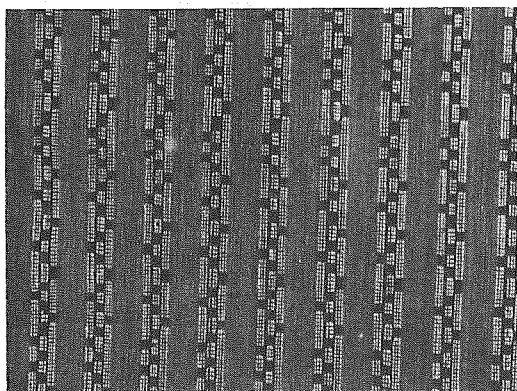
	経	緯
地色	紺 白	紺 白



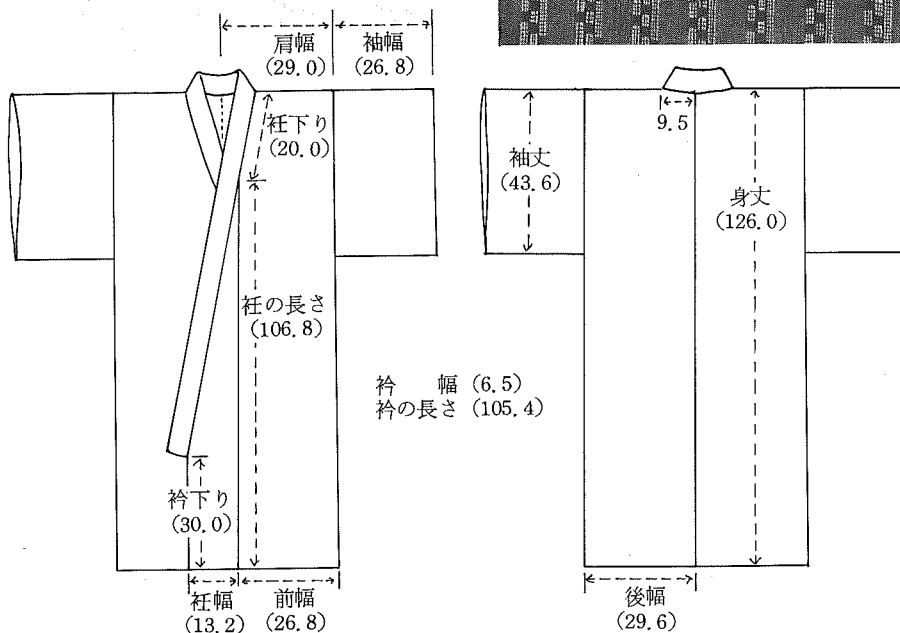
紋のパターン



*平織地は経も緯も紺白のやしらみ織りである。紋の部分は紺の経糸が浮いている。細かい柄作りで、このようなやしらみ花織は喪服として使用されている。本品は着古されており、破損部分がある。着物は衿下がりが長く、広衿でないなど和装に近いスタイルだが丈は短く、袖口は平袖となっており、比較的製作年代は新しいのではないかと推定する。



形態及び寸法



木綿灰色地やしらみ花織着物

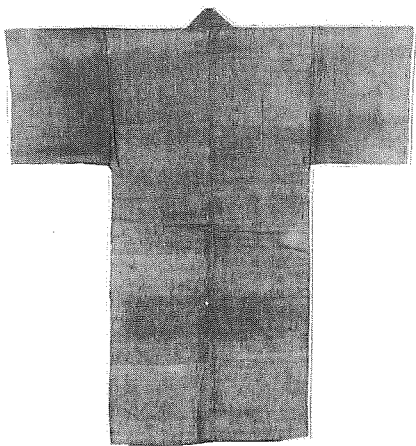
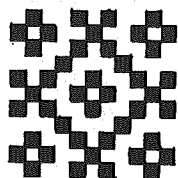
素材：経（木綿） 緯（木綿）

密度：経36本×緯36本

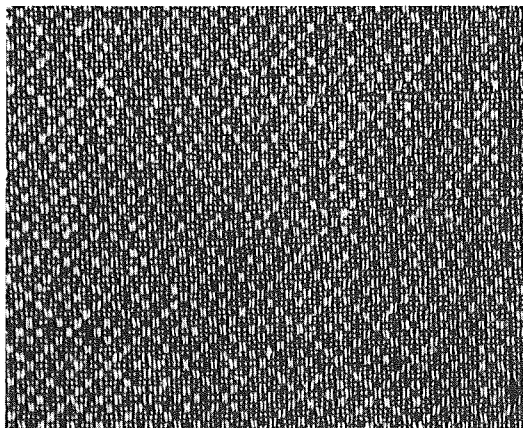
染色：

	経	緯
地色	青（藍）	浅葱（藍）

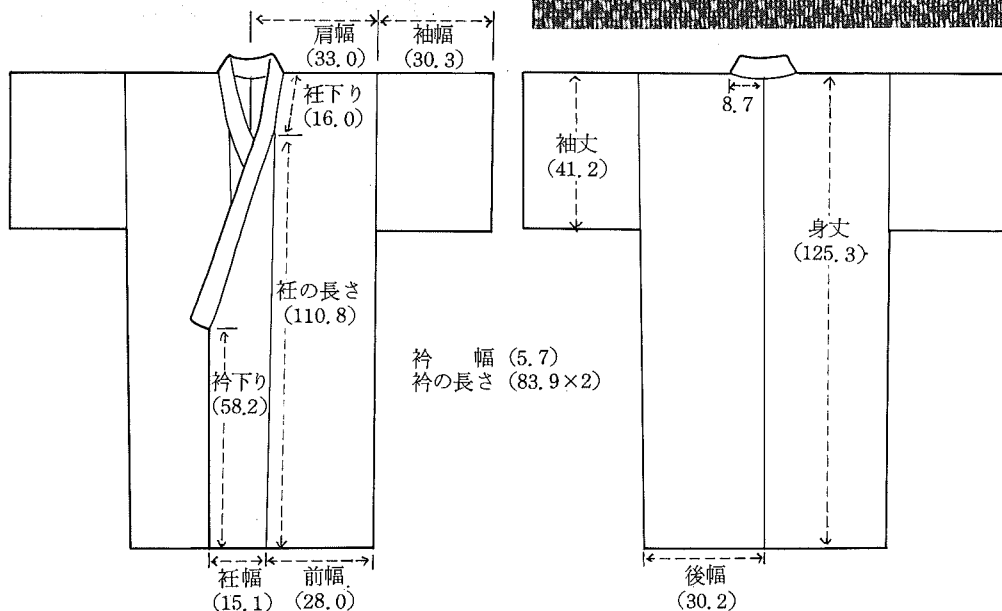
紋のパターン



*経糸は芭蕉か苧麻か判断が付きにくいですが、上質の苧麻であろう。染めは藍により、経緯の濃度が少し違うので、花織の文様がよく浮きで、経糸の浮いた面を表に使用している。着物の丈は短く、襦も入っており、疏装の形をとっているが、木綿の肩当てがあり、広衿でないなど古典的なスタイルとは異なる。製作及び縫製は、大正期に入り、首里で行われたものであろう。



形態及び寸法



木綿浅葱地花織衿上衣

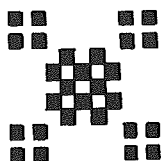
素材：経（木綿） 緯（木綿）

密度：経24本×緯22本

染色：

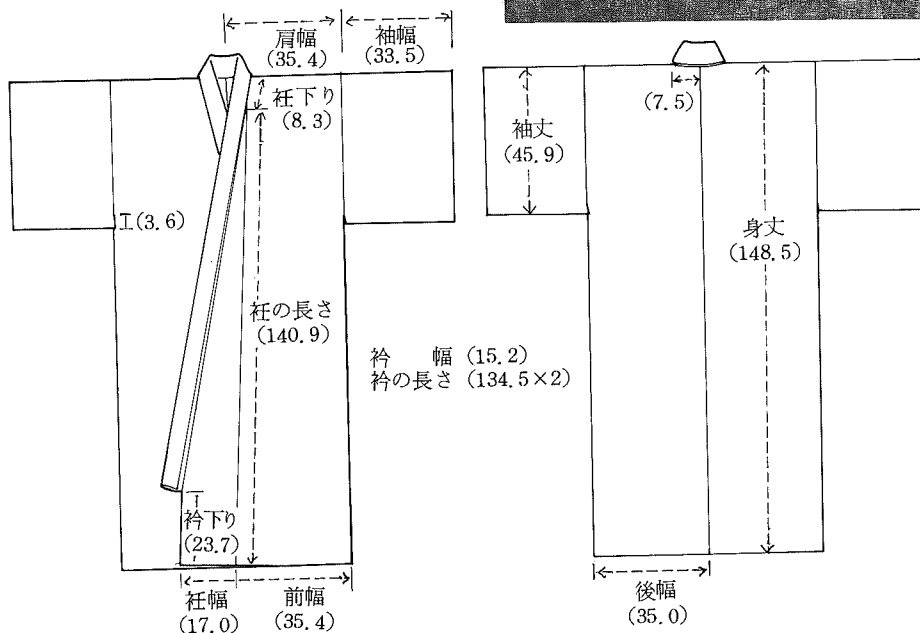
	経	緯
地色	浅葱（藍）	浅葱（藍）

柄のパターン



*素材は手紡ぎの木綿糸でざっくりと織り上げられている。経糸と緯糸の密度が変わらないということと、経緯の色が同じであるため花の紋がはっきりしない。紋は緯の浮いた面を表に使用している。裏には木綿浅葱の無地の布が使われており、かなり重い衣裳である。身丈が長く男性の衣裳でなかったかと考える。脇には裾がないが、明治期あたりに製作されたと推定する。

形態及び寸法



絹木綿浅葱地ロートン織衿上衣

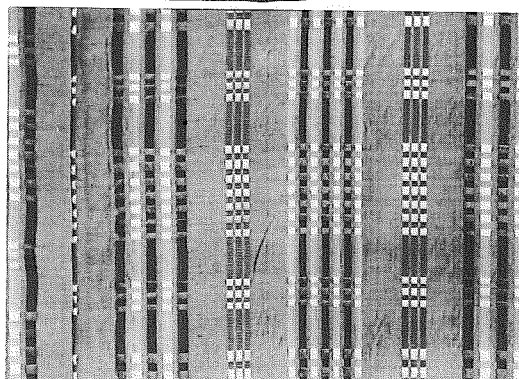
素材：経（絹） 緯（木綿）

密度：経31本×緯25本

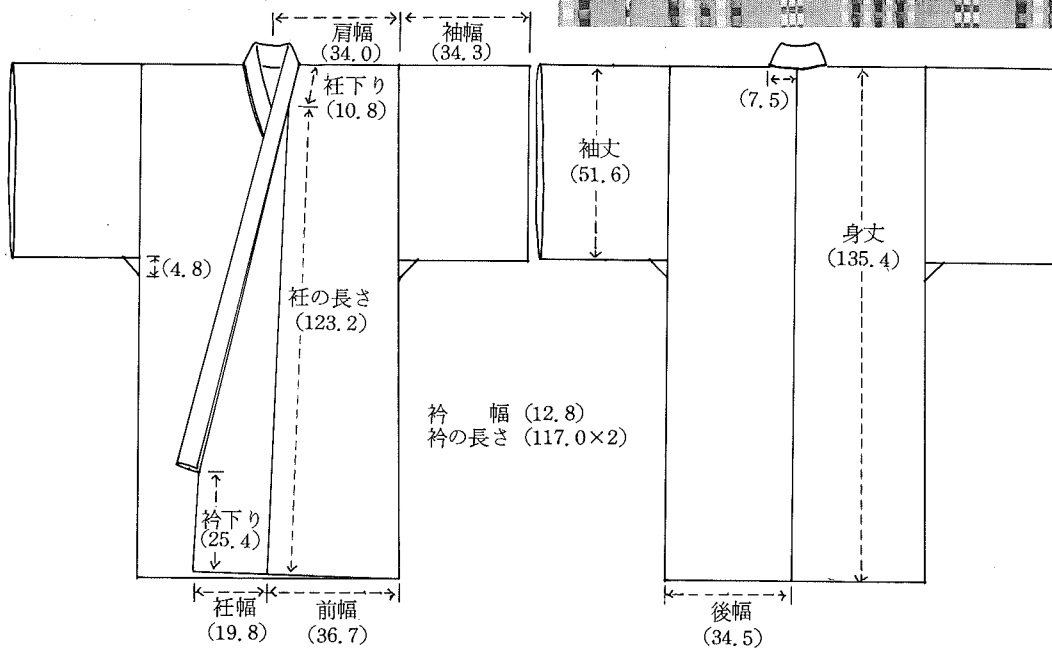
染色：

	経	緯
地色	浅葱（藍）	浅葱（藍）
紋部	赤（福木+蘇枋） 白（山桃か）	

＊本資料は後年、布を琉装形態に仕立てたもので裏や衿には木綿の紫布が使われている。
紋部には赤、白、浅葱の色糸が使われており、浅葱の部分は赤い色とのやしらみになっており、裏には赤い経いとが浮いている。写真や図をみても分かるように文様が3・5・7の奇数で構成されている。



形態及び寸法



芭蕉紹織経縞緋着物

素材：経（絹） 緯（芭蕉）

密度：経30本×緯20本

染色：

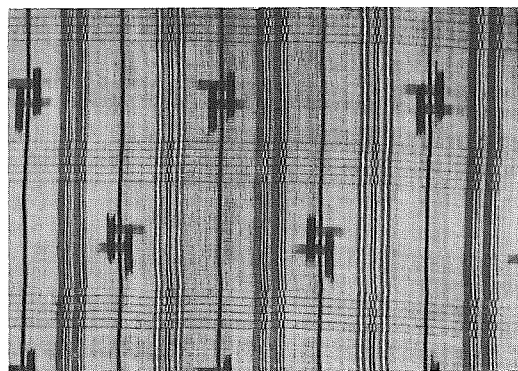
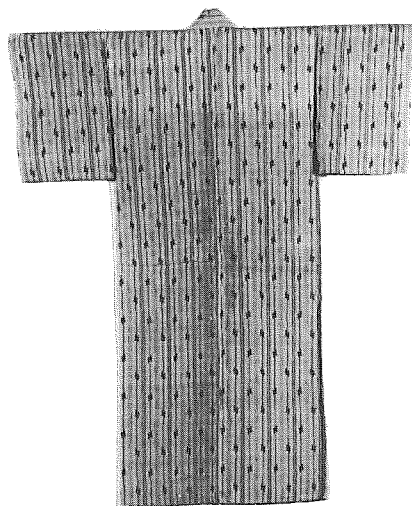
	経	緯
格子	紫・黒（化染）	経に同じ
緋	黒（化染）	黒（化染）

緋の名称：カーヌチカー

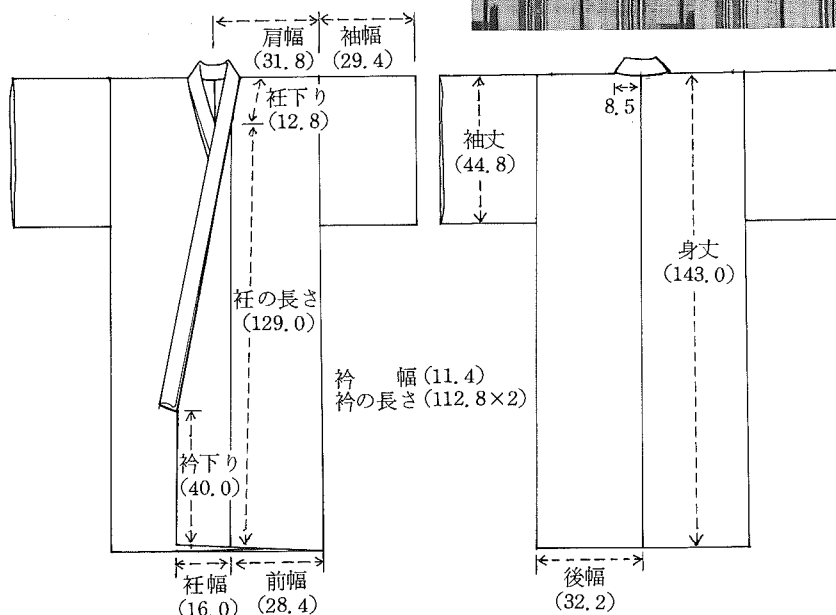
経糸の種類：経 1種類

緯 1種類

＊経糸のつなぎ目には結玉、縫り継ぎの跡が見当たらず、未精練の絹糸ではないかと考える。緯糸は芭蕉で、白い縞糸は機械紡績の麻糸である。黒い縞糸は木綿で、地には染色されていない。身丈が長く、和装の長着のようにおはしりの部分を含んでいる。肩当てもついている。袖は平袖で袖口が大きくあいている。経縞に緋を組み合わせたこのような柄をアヤヌナーカーと呼ぶ。大正期あたり首里で織られたものであろう。



形態及び寸法



芭蕉茶色地経縞絹織着物

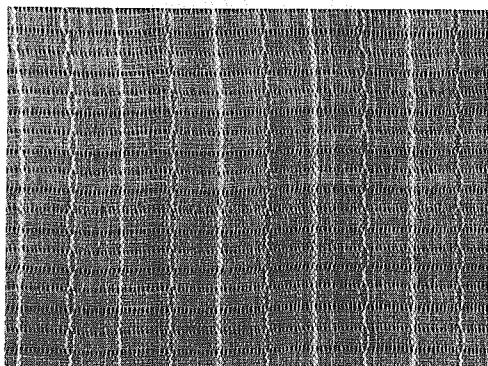
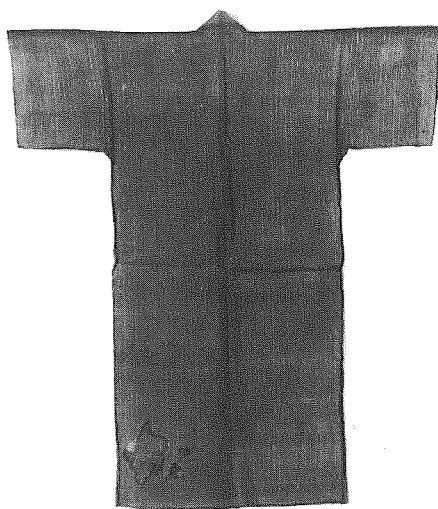
素材：経（芭蕉）縞は絹糸 緯（芭蕉）

密度：経31本×緯25本

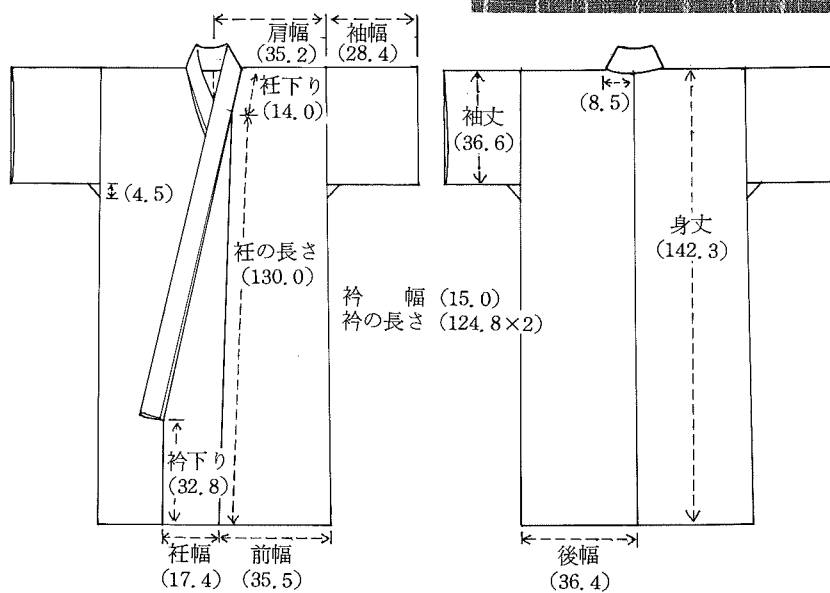
染色：

	経	緯
地色	薄茶（テカチ）	経に同じ
縞	赤（蘇枋か） 白	

*経糸には、つなぎ目の結玉がほとんど見られず上質のナカグーで繊維の長いものを使用している。繊維はニーガーシーで糸の段階で精練を行っている。経縞の赤と白の糸は絹糸である。糸が細く、縞の部分が細かくていねいに織られている。形は琉装本来のもので、夏の上衣として使用されたものであろう。身丈は和装の長着と同じくらいで、琉装としては長いほうである。また袖は短く、男物として利用された物ではないだろうか。製作は明治中期に首里で行なわれたものだと考える。



形態及び寸法



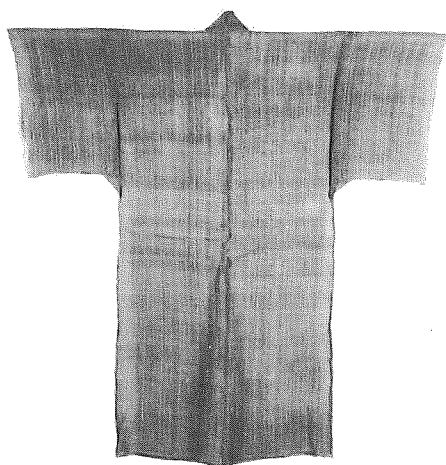
芭蕉茶地経縞絹織上衣（891・B-5）

素材：経（芭蕉）縞は木綿 緯（芭蕉）

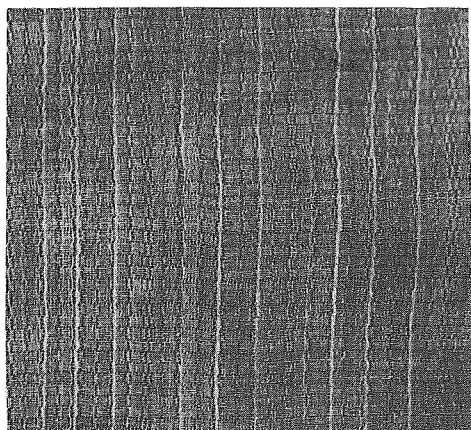
密度：経20本×緯14本

染色：

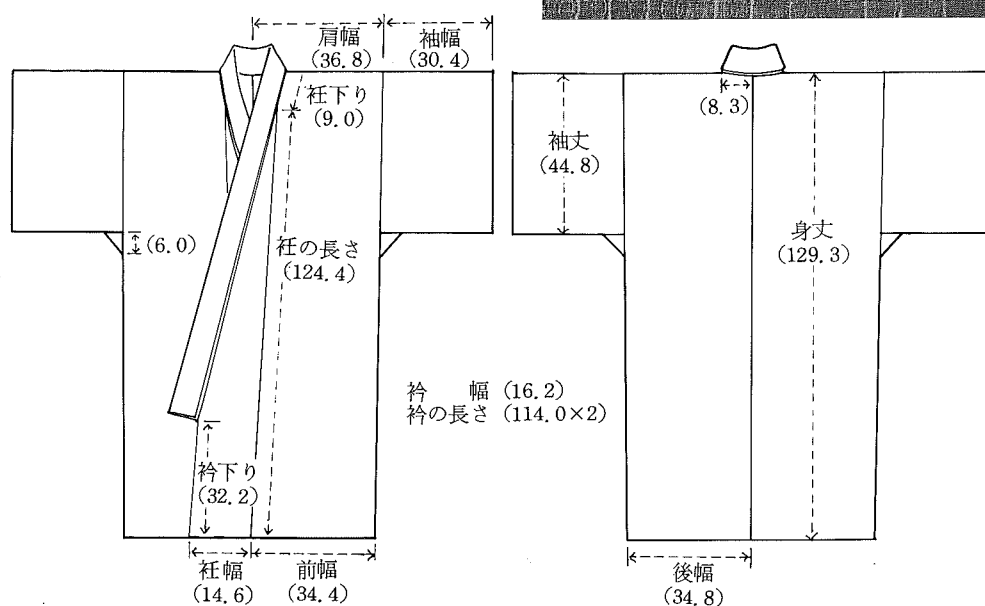
	経	緯
地色	茶（山桃+テカチ）	経に同じ
経縞	濃紺（藍） 浅葱（藍）	



*繊維は前ページで紹介した芭蕉の絹織よりも太く、アラバサーと呼ぶものに近い。糸の段階で精練し、薄く茶色に染めており、首里のニーガシーの技法による。着物は夏の琉装の形態をしており、仕立ても古くやはり明治中期に織られたものであろうか。『沖縄織物の研究・裂地図録』（田中俊雄・玲子著）によると昭和初期には読谷地方でも織っていたようで、本資料と類似の資料が紹介されている。身丈が長く、男性の衣裳であったと思われる。



形態及び寸法



絹麻紺地紹織着物（1013・B-41）

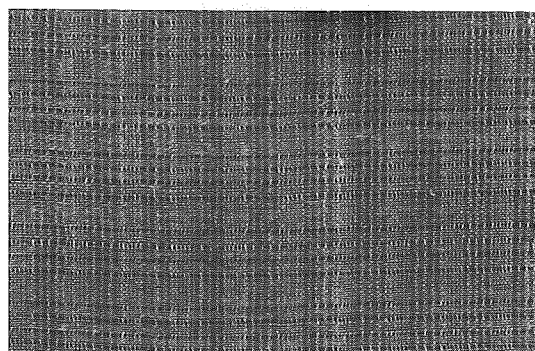
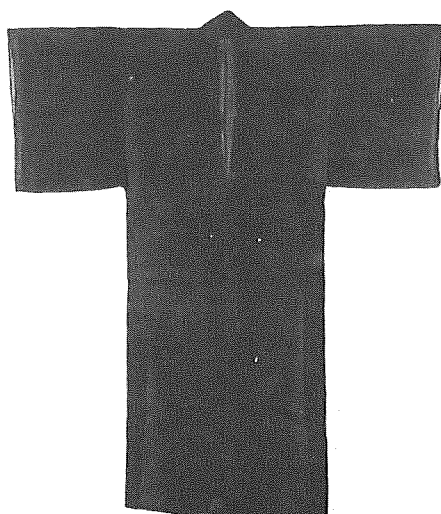
素材：経（絹） 緯（苧麻）

密度：経18本×緯25本

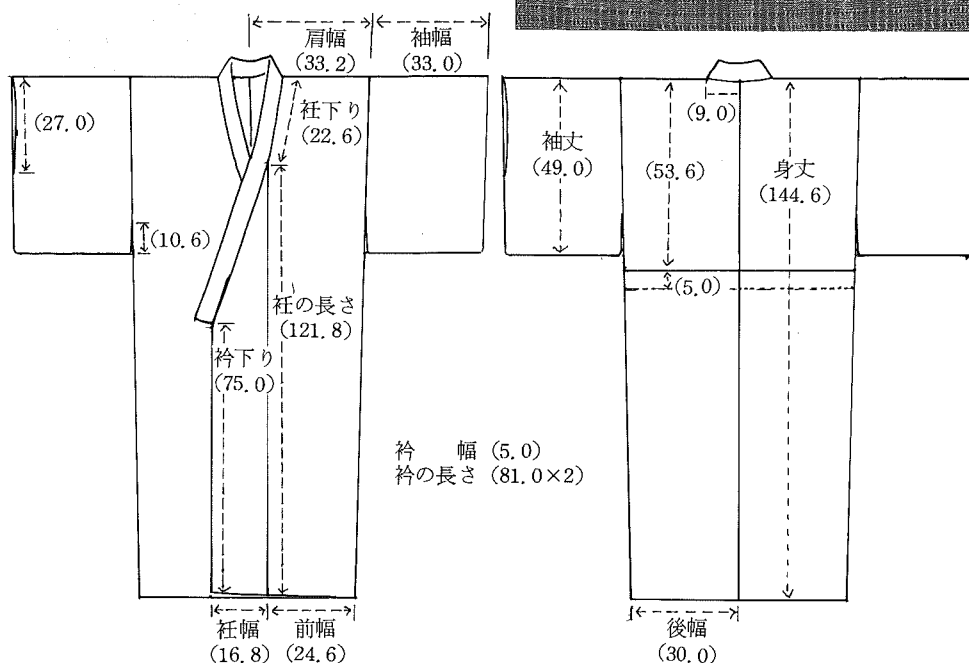
染色：

	経	緯
地色	紺（藍）	紺（藍）

*経糸は細い生絹の糸で、緯糸はつなぎ目に縫り継ぎの跡のある苧麻の糸である。
着物は丈が長く、広衿ではなく、袖口の小さい小袖の形態で完全に和装のスタイルである。
おそらく染め織りも仕立ても比較的新しいと考えてよいのではないだろうか。製作は古く考えても大正以後であろう。



形態及び寸法



絹朱地紹織胴衣（1601・A-103）

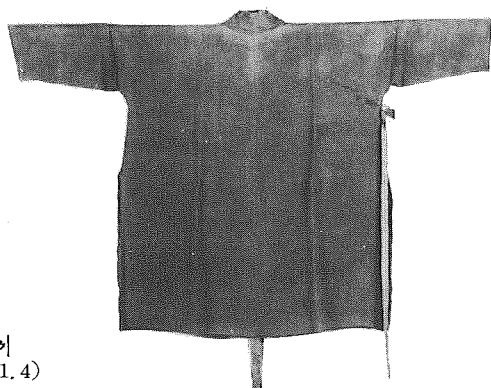
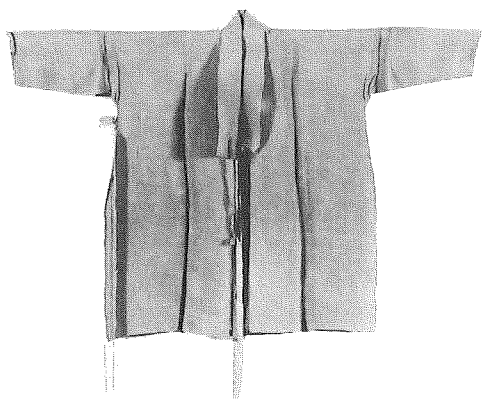
素材：経（絹） 緯（絹）

密度：経32本×緯21本

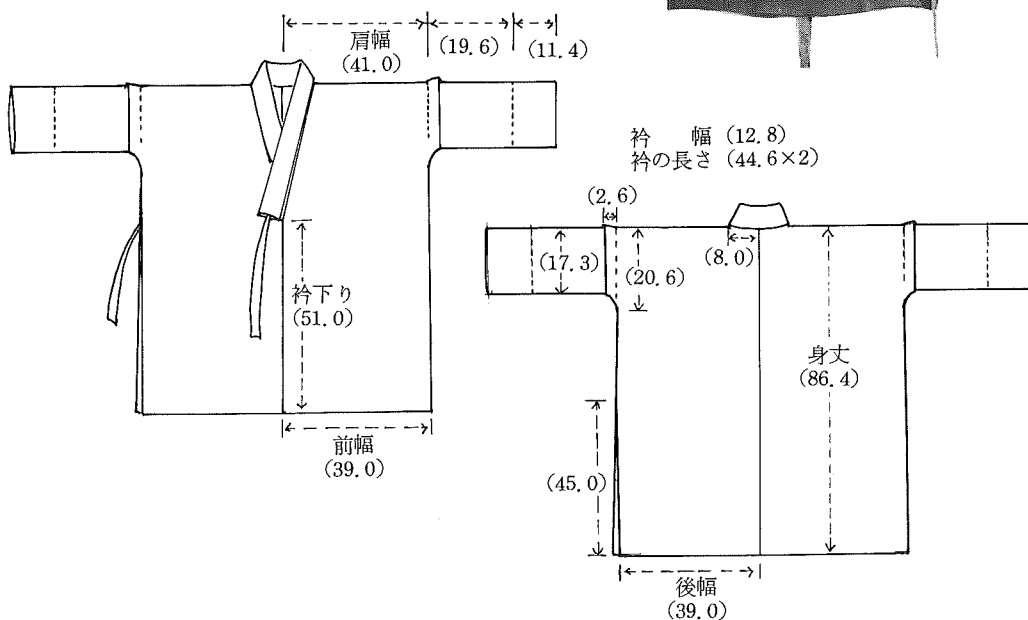
染色：

	経	緯
地色	朱（蘇枋+福木）	経に同じ

*一重の胴衣で、紹織の織巾が41cm、明治初期首里で織られ上流階級の衣裳として使用された資料だと考えてよいだろう。地は明るい柿色で福木の黄色をベースに蘇枋を染めたものである。経糸は縫りが強くかけられており、布端のぬいしろの部分は縮緬のようにになっている。形態は琉装の胴衣で、袖が筒状になっているが、脇には褶がなく丸くくられている。その他は直線断ちで、縫い方や始末の仕方がていねいなわりに、形態、布の断ち方などは簡素である。



形態及び寸法



芭蕉経縞紹織子供着

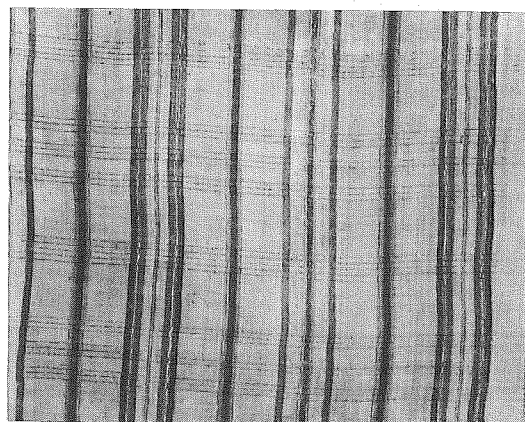
素材：経（芭蕉） 緯（桐板）

密度：経28本×緯19本

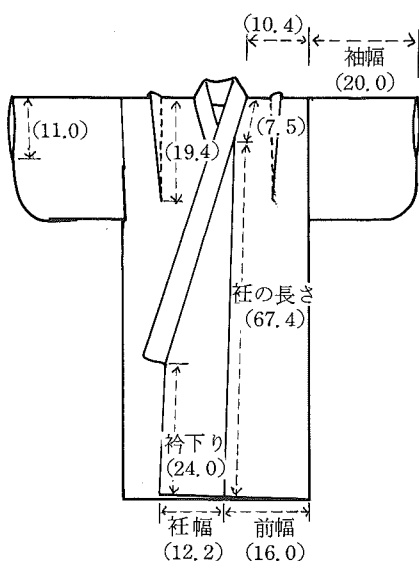
染色：

	経	緯
地色	染色しない糸	経に同じ
経縞	赤（唐ガシー） 緑（福木+藍） 濃紺（藍）	

*経糸はつなぎ目に結玉のある芭蕉だが、緯糸には縫り継ぎの跡があり、つやも見られ桐板ではないかと思われる。仕立ては元禄袖の和装のスタイルで、後見頃は布幅いっぱいの一つ身の長着である。一つ身の着物は嬰兒から一、二歳までの子供が使用するといわれているが、身丈が長く、おそらく二歳以上のこどもが着用したものであろう。本資料のような赤い縞柄の織物を朱綾と呼ぶ。赤い縞糸は唐ガシーと言われた輸入の糸である。



形態及び寸法



衿 幅 (4.0)
衿の長さ (56.0×2)

